

Sexual Diversity in Picture Books

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水間, 千恵, MIZUMA, Chie メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1289

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



絵本で考える性の多様性

水 間 千 恵

はじめに

近年、教育現場における性的マイノリティをめぐる対応には大きな変化が生じている。転機となったのは、2003年に成立した性同一性障害者に関する法律である⁽¹⁾。これを受けて、2010年に文部科学省は教育現場に対して、まずは「性同一性障害のある児童生徒」への配慮を求め⁽²⁾、2015年には「悩みや不安を受け止める必要性は、性同一性障害に係る児童生徒だけでなく、いわゆる『性的マイノリティ』とされる児童生徒全般に共通する」⁽³⁾と、その対象範囲を拡大した。さらに、現場から寄せられた質問をもとに作成したQ&A集⁽⁴⁾においては、「性的指向」「性自認」にかかわる問題について教育現場で配慮や支援の対象とすべき旨、明記するに至った。

このような流れを受けて、児童書出版界でも、性的マイノリティに関する主題を扱う作品の出版点数が急激に増加している。とりわけ2015年以降は創作読み物が相次いで発表され、なかには文学賞を受賞するものや、公的機関から推薦を得るものもあり、文学作品としての質の向上がみられるようになってきている⁽⁵⁾。とはいえ、その多くはティーンエイジャー向けのいわゆるYA小説や、少なくとも小学校高学年以上を対象とする読み物であり、幼い子どもを対象にした作品はまだそれほど多くないのも現実である。もちろん、性をめぐる主題がYA小説の得意分野であるのは、読者の発達段階を考慮すれば当然のことでもあろう。だがその一方で、性的指向や性自認に関する悩みが思春期の子ども特有のものではなく、より幼い子どもたちに共有されることも広く認知されている⁽⁶⁾。このような状況を踏まえて、本稿では、読み物よりも幅広い年齢に訴求力を持ちうる「絵本」を対象に考察を進めていく。性的マイノリティにかかわる内容を含み、かつ、日本語で読める代表的な物語絵本をとりあげて、このテーマが現在の日本でいかに扱われているかを検証し、児童文学としてそれらをどう捉えるべきかを考えていきたい。

1. ジェンダーからセクシュアリティへ

日本の児童書出版界でも、読み物では1990年代から性的マイノリティに関連した主題を持つ

作品が本格的に出版されるようになっていた⁽⁷⁾。だが、子ども向けの絵本についていえば、伝統的に、一部のノンフィクション作品を除いて、「性」自体が主題として扱われることはまずなかったといってよい。90年代に入り、ようやく「性」を主題とする作品が出版されはじめた時にも、そこで問題にされたのは、まずはジェンダーであった。たとえば、バベット・コールの『トンデレラ姫物語』(1996年)、ロバート・マンチ(文)、マイケル・マーチェンコ(絵)『紙ぶくろの女王さま』(1999年)、ポール・O・ゼリンスキー(絵)、アン・アイザックス(文)『せかいいち大きな女の子のものがたり』(1996年)などはその好例である。先の2作は、昔話でおなじみのお姫様像を転覆し、最後のものは、開拓期アメリカのトール・テールの型を用いて伝統的な「女らしさ」を解体している。いずれの作品も、伝統的な女性性を少女たちに内面化させるための文化装置として機能してきた伝承文学に対する批判であり、まさにフェミニズムの産物といえよう⁽⁸⁾。とはいえ、これらの作品は、子どもたちが純粋に楽しめる内容と表現形式を備えた優れた児童書であり、決してプロパガンダ絵本ではない。その一方で、上野千鶴子や落合恵子といった日本を代表するフェミニストたちの手で紹介されたことからわかる通り、日本での出版にあたって、啓蒙書としての役割が期待されていたであろうことも想像に難くない。但し、たいていの場合、子どもの読者にとって訳者の名前は意味をなさない。従って、彼らが物語の内容に予断をもつ可能性も低い。

性的マイノリティにかかわる主題をもつ絵本も、まずは、当事者が関与する形で日本に紹介されている。ニューヨークのセントラルパーク動物園に住む雄のペンギン2羽が、共同で雛をかえして子育てをしたという実話を絵本化した『タンタンタンゴはパパふたり』の日本語版が2008年に出版されたとき、レズビアンであることを公言して議員活動に従事していた尾辻かな子が、訳者のひとりとしてその名を表紙に連ねていたのである。そもそもこの作品は、原著者であるゲイカップルのジャスティン・リチャードソンとピーター・パーネルが、ちょうど子育てを考えはじめていたころに、雄ペンギンのカップルに関するニューヨークタイムズの記事を読んだことがきっかけで誕生したという背景を持つ。作者ふたりが、同性愛や同性愛者の存在に光をあてるというよりも、自分たちが築こうとしていた家族の在り方を肯定し、祝福することに力点をおいていることは、物語の冒頭に明確に示されている。舞台となる動物園は、「いろんな家族」が動物を見に来る場所だと定義され、そこで暮らす動物たち



図1

『タンタンタンゴはパパふたり』ポット出版、2008年

も、すべて家族単位で紹介されているのである。主役となる2羽の雄ペンギンの関係は、「女の子ペンギンとはあまりつきあわない（中略）そんな時間があったら、ロイとシロは頬ずりしあっている」(12)⁽⁹⁾とシンプルに紹介され、「同性愛」や「ゲイ」といった、セクシュアリティを直接想起させる言葉は使われていない。巻末に添えられた「作者あとがき」が、実話に基づいた創作だと強調するため、2羽の雄ペンギンになぞらえて表現された（と考える読者にとって）同性愛者の姿が自然なものとして受けとめやすくなり、しかもその際に焦点化されるのも、性的指向というよりは、むしろライフスタイルとなる。十分な予備知識なしにこの作品に接した子どもであれば、雄ペンギンによる子育ての物語、すなわち古い性役割の逆転が主題だと捉えてもおかしくはない。

さらに、表情豊かな漫画風のキャラクターと滑稽味のある画風で知られるヘンリー・コールのイラストレーションによって、作品には温かみとユーモアが加味され、全体として穏やかな仕上がりととなっている。とりわけ、さまざまなアングルから描かれた抱卵の詳細や、卵の変化、そして雛の誕生をクライマックスに据えた構成には、物語性に対する制作者たちの高い意識が反映されている。しかもコールは、絵本特有の「めくり」の効果を最大限に利用して、このクライマックスを盛り上げることも忘れてはいない。このようなイラストレーションの力が、子ども向けの絵本としての作品の質の確保におおいに貢献していることは明らかである。原著が、出版の翌年にアメリカ図書館協会（ALA）の一部門である児童図書館サービス部会（ALSC）によって優良児童書（Notable Children's Books）⁽¹⁰⁾ に選ばれたことは、子ども向けの本としてのこの作品の価値を裏づける。

このように、『タンタンタンゴはパパふたり』が、全体として控えめなトーンで、雄ペンギンによる子育ての物語という体裁をとっているのに対して、2015年に翻訳出版された『王さまと王さま』は、男性どうしの結婚を描いている点で、よりラディカルな作品だったといえる。オランダ人女性リンダ・ハーンとスターン・ナイランドの手になるこの物語は、昔話の書き換えという、フェミニストがかねてから実践してきた手法を用いて、セクシュアリティをめぐる伝統的な規範に異議を申し立てている。主人公は、婚期を過ぎた世継ぎの王子で、母である老女王から、結婚して王位をつぐようにと命じられて、嫌々ながらも見合いを繰り返す。そしてついに出会った運命の相手が、見合い相手の姫君ではなく、その付き添いとしてやってきた彼女のきょうだいだったという筋立てである。ポップな配色とコラージュで表現された画面は、



図2

『王さまと王さま』ポット出版、2015年

どの頁でも雑然とした雰囲気醸しだし、それ自体が、規範的な価値観への抵抗となりえている。明るい諧謔性に満ちたこのイラストレーションによって、物語のもつ面白さは倍加し、作品にはパロディ絵本としての普遍的な価値が生まれている。社会的なメッセージの有無にかかわらず、テキストとイラストレーションが見事に絡み合って主題を奏でているこの作品は、絵本それ自体として高い水準にあり、何よりも、子どもたちが先入観なしに読んで楽しめる物語世界を創りだしている。

元見合い相手の（かなり「個性的な」）お姫様たちがアリアを歌いマジックを披露する（「秩序」とは程遠い）自由な雰囲気のコイタルウェディングの場面、恋人どうしが「王さまと王さま」になって「いつまでも幸せに暮らしました」（29）という結びの一文、そして、エンドページに配されたキスを交わすふたりの王さまのイラストレーション（肝心な部分をハートマークで隠している）など、ハーンとナイランドによる文と絵は一体となって、王子様とお姫様の幸せな結婚を描いた伝統的な昔話を解体する。とはいえ、この物語が揶揄しているのは、セクシュアリティをめぐる規範のみではあるまい。王子さまとの見合いにやってきたお姫様のひとりが城の召使いと交際をはじめ、引退した女王が水着姿で日光浴を楽しみ、王宮のネコのみならず野ウサギまでもが王冠をかぶった姿で描写されるとき、大人の読者であれば、もっと広い対象に向けられた風刺精神を感じとるにちがいない。

さらに、最後の見開きで、笑顔を浮かべるふたり王さまの背後に描きこまれた小さな気球は、物語にまた新たな解釈の可能性を提供する。気球の搭乗者が誰なのかは詳らかにされないものの、少なくとも（結婚相手になった王さまの姉妹、すなわち元花嫁候補と同じ）長い金髪で、白い衣装を身に着け、深呼吸するかのようにのびのびと両腕を広げている。しかもその人物の真下には、ご丁寧にも、膨らんだ乳房をもつ牝牛が柵とともに配されているのである。空中散歩を楽しんでいる様子と解放感が十分に伝わってくるその人物の姿を横目で見ながらテキストを読むとき、「いつまでも幸せに暮らしました」という結びの一文の主語が、じつは、結婚した「ふたり」ではなく、「みんな」になっていることの含意を、否が応でも考えさせられるだろう。もちろん、こういった仕掛けは、子どもの読者を想定したものではない。だが、このような重層的な読みの可能性が含まれていることは、真の意味で優れた子どもの本の条件でもある。優れた作品は、子どもが楽しめることはいまでもなく、成長の過程で読むたびに新たな気づき生まれ、大人になってからも異なる読み方で楽しめるのが常なのである。

2. 絵本として読む、教材として使う

『王さまと王さま』が、古い価値観を揺さぶり、新しい価値観を提示する絵本であることは間

違くない。だが他方、鋭敏な読者であれば、この作品が内包する大いなる矛盾にもすぐさま気づかされるはずである。つまり、妊娠や出産の可能性がない婚姻を称えているその物語が、王子様やお姫様のいる世界、すなわち血の繋がりによる家督継承が要請される君主制社会で展開しているという点である。原著出版から4年後、ハーンとナイランドは、読者からの要望に応じて続編 *King & King & Family* (2004) を出版し、そのなかで、ふたりの王さまに女の子の養子を迎えさせた。このため、「王国存続問題」に限って言えば、解決策は提示済みといえるのかもしれない。しかし、この続編が出版されたことによって、第1作が有していたパロディとしての批判力が弱体化したことは否定できない。なぜなら、「王国の存続」の可能性を肯定したことによって、もとの物語の批判の矛先が狭められてしまったからである。王子が王子と結婚するところで終わってれば、その物語は「結婚という制度そのものやそれのみをよしとする社会体制」への批判としても機能しえたであろう。だが、続編と合わせて読むとき、その批判は狭められてしまう。王子と王子が結婚して養子を迎えて家族を拡大するという物語は、多様な結婚の在り方は肯定しても、多様な結びつきの在りようにはまでは読者の目を向けさせない。血が繋がっていないにせよ、ふたりの大人が子どもを養育するという家族の姿を強調するとき、そこから外れる形の家族や個人を新たなマイノリティへとおいやる危険性すらある。第1作の結末で気球に乗った人物はどこに行ってしまったのか。続編の出版によって、その存在は、観念上、完全に消去されてしまったのではないか。この点について、続編 *King & King & Family* が、法制度の整備が進み多様な結びつきの在りようが広く社会に肯定されているオランダではなく、同性婚の合法化を目指す社会運動が活発化していたアメリカの読者の求めに応じてアメリカで出版されたことは、きわめて示唆的である。

そもそもパロディという形式は、オリジナルの持つ価値観を否定し壊すことを目的としつつも、実は、オリジナルへの依存なくして存在しえないがゆえに、否定したはずのオリジナルの価値観をときに反復強化する道具と化してしまう。『王さまと王さま』にもその危険はつきまとう。「お姫様と王子様」であろうと、「王子様と王子様」であろうと、ふたりが結婚してめでたしめでたしとなる物語では、結婚という制度それ自体への疑問は不可視化されるからだ。それどころか、「結婚」を「いつまでも幸せに暮らしました」という結末を得るための必要十分条件と位置づけて、そのようなイデオロギーの強化に貢献してしまいかねない。だが、『王さまと王さま』には、伝統的な規範を転覆したうえ

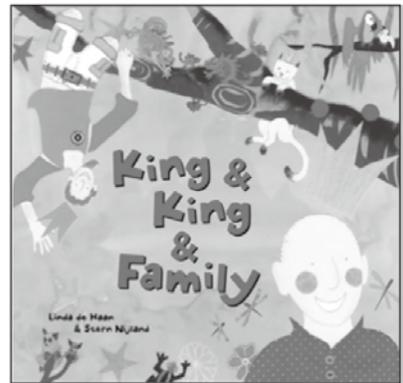


図3

King & King & Family
Tricycle Press, 2004

で、さらにその結末をもう一度転覆する仕掛けが施されていた。それが気球に乗った人物である。昔話を解体した自らをさらにもう一度解体する——『王さまと王さま』は、本来そのような作品なのである。

ひるがえって、日本語版に目を向けると、メッセージ性をひときわ目立つ形で強調した出版戦略には、一抹の不安を感じざるをえない。日本語版には、裏表紙に「LGBTをテーマにした絵本」である旨が明記され、「同性を好きになってもちっとも不思議じゃない！」とのメッセージが載せられていることにくわえて、「訳者あとがき」では、「性的マイノリティに対する差別や偏見をなくすために、幼い頃から性の多様性に対する理解を育むことが大切であり、子どもたちにもわかりやすい教材が必要だと考えていた」(33)との、出版意図が語られているからである。このような明確な目的があって初めて日本での出版が可能になり、教育現場を含めて積極的な活用が進んでいるという側面あるとすれば、それは一概に否定すべきものではない⁽¹¹⁾。だが、子どもの読者が楽しんで受容できるのは、この作品に絵本としての力が備わっているからこそ、すなわち、昔話の型を用いたシンプルでわかりやすいストーリーと主題をみごとに表現したイラストレーションの力、それらがあわさって成立している文学作品だからこそである。教材としての役割を強調するあまり、「絵本」としての楽しみ方が制限されたり、「パロディ文学」としての可能性が排除されたりするとしたら残念なことである。同時に、多様性への理解と共感を育むというアジェンダによって、このジャンルが持つ潜在的な危険性を読者の目から隠してしまうおそれの方が一にもあるとすれば、それは憂慮すべき事態であろう。

3. アメリカにおける「LGBT 絵本」⁽¹²⁾

性的マイノリティに関する主題を扱う絵本の日本での現状を考えるさいには、アメリカにおけるこのジャンルの歴史についての知識が不可欠である。アメリカがLGBT児童文学の先進国であるというだけでなく、日本の児童書出版界に最も大きな影響を与えているからである。非英語圏諸国の作品や作品に関する情報もアメリカ市場を経由して、あるいはアメリカの書評を通して日本に紹介されることも少なからずあり、『王さまと王さま』もまさにこのケースにあてはまるのである。

アメリカにおけるLGBT絵本の歴史は、1980年代に始まった。当時はアメリカでも、性的マイノリティを正面から描いた絵本は翻訳ものに限られていたが、Lesléa Newmanの*Heath-*

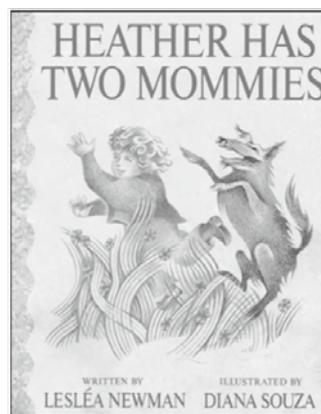


図4

Heather Has Two Mommies
Alyson, 1990

er Has Two Mommies (1989) が登場したことで、その状況が大きく変化することになった。みずからもレズビアンだった Newman が、「自分の子どもに読ませる本がない（自分たちの在り方を自然なものとして肯定する絵本がない）」と嘆く友人たちの声に促されて創作にとりかかり、画家 Diana Souza の協力を得て、子どもと分かち合うことを目的に完成させたのがこの作品である。当初はカンパを集めての自費出版であったが、これが話題を呼び、翌 1990 年には Alison Wonderland からペーパーバックが出版され一般市場に出回るようになった。以来、この作品は、同じ年に同社から出版された Michael Willhoite の *Daddy's Roommate* とともに、多くの称賛と批判を浴びながら、このジャンルを代表する作品となって現在に至っている。

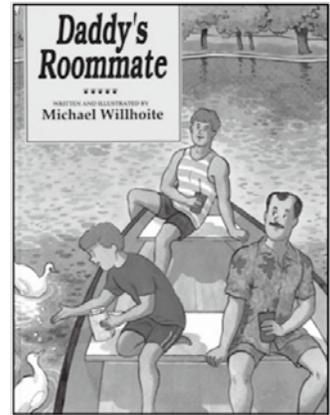


図 5

Daddy's Roommate
Alyson, 1990

Heather Has Two Mommies の主人公は、レズビアンカップルの幼い娘である。彼女は、託児施設に通いはじめたときに、自分の家庭環境が他の子どものそれと異なることに気づいて不安を覚える。だが、当の託児施設で、世の中には多様な家族の形があるのだと教えられ不安を払拭する。他方、*Daddy's Roommate* の主人公は、小学生程度にみえる少年である。両親が離婚して母親と暮らしているその少年の視点で、同性の恋人と暮らす父親のライフスタイルや、彼らと自分との関係が肯定的に描きだされている。この 2 冊がアメリカ社会でどのように評価され、どのように批判されてきたかという点については、すでに別稿にて論じたためここでは詳細を省く⁽¹³⁾。重要なことは、この 2 冊がいずれも、子どもたち自身が自分の家庭の在りようを肯定的に受け止められるようにしたいと願う、当事者たちの切実な思いから誕生した作品だったという点である。以来約 30 年にわたって、この 2 冊は公共図書館での開架や貸し出しを差し止めるよう請求されたり、教育現場での利用を禁じようとする請願がだされたり、つねに議論的になってきた。『タンタンタンゴはパパふたり』や『王さまと王さま』のような 21 世紀に出版された新しい作品も、この 2 冊から始まるジャンルの歴史のなかに位置づけなければ、そこに向けられる称賛や批判の意味を理解し、正しく評価することはできないだろう。

Heather Has Two Mommies は、出版から 10 年目に、大胆な改訂が行われている。幼児向け絵本として不適切だと著者自身が考えた部分を 8 頁にわたって削除したのである。以後、この 10 周年記念版のテキストが広く流通してきたが、2015 年には、イギリスの児童書出版界の新興勢力 Walker のアメリカ支社で、絵本出版に力を入れている Candlewick Press から新版が出版された。テキスト自体にもいくつか修正が施されたが、この新版の目玉は、やはりイラストレー

ションの変更である。そもそも Alison 社版のイラストレーションは表紙以外すべてが白黒で、担当画家 Souza の、デッサン風の骨太なスタイルもあいまって、物語世界を暗く重苦しいものにしてきた感が否めない。これに対して、Candlewick 版の画家 Laura Cornell は、淡い水彩画で、明るい躍動感に満ちた世界観を作り上げている。とりわけ、作品の「顔」ともいべき表紙の印象の変化は大きい。Candlewick 版は、ふたりのママと手をつなぎ、ペットたちとともに木漏れ日のなかを笑顔で歩く主人公を描いているが、これは“The most important thing about family is that all the people in it love each other” (27) という一文で表現されているこの作品の主題を正確に反映しているだけでなく、読者に対してその普遍性を強烈にアピールしている。表紙に登場しているふたりの母親はどこにでもいそうな普通の女性として描かれており、Alison 社版での画家 Souza が、レズビアンの類型的な描写に傾きがちだったこととも好対照をなす⁽¹⁴⁾。

このように、LGBT 絵本の原点ともいべき作品が装いを変えて新たに市場に姿を見せたことは、この 30 年間にアメリカ社会でおきた、性的マイノリティを取り巻く環境の変化と無縁ではない。同時に、児童文学というジャンル自体に起きた変化が、表現手法の面で LGBT 絵本にも大きな影響を与えていることも見過ごせない。リアリズム小説の派生ジャンルとして 1970 年代に最盛期を迎えたいわゆる「問題小説」が、子どもや若者の悩みを正面からとりあげて大人社会の告発・糾弾に終始するあまり、一面的で単純かつ浅薄な作品になりがちであったのに対し、80 年代以降の児童文学では社会性の強い話題を扱う際にも、題材、文体、表現手法の多様化が進み、特に近年、年齢層の低い読者を想定する作品の場合は、深刻な問題をもユーモアと軽みをもって扱う傾向が強くなっている。LGBT 絵本の例として、ここでは、2015 年に出版された *Stella Brings the Family* をとりあげておきたい。主人公の持つ悩みが *Heather Has Two Mommies* の主人公のそれと似ているため、比較素材としての適性が認められるからである。*Stella Brings the Family* でゲイカップルに育てられている主人公は、「母の日」の学校行事に招待状を書く相手がみつからず悩むが、母親とは「傷ついた時にキスしてくれる人」のことだと考えて、最終的に、自分に愛情を注いでくれる親族みんなを招待する。物語は深刻ぶったところがなく軽やかに展開する。やや頭でっかちに造形されたキャラクターがかもしだすユーモラスな雰囲気作品全体を支配し、結末にも、単なるハッピーエンドではなく読者をクスリと笑わせる工夫が凝らされている。しかも、*Heather Has Two Mommies* が規範的ではない家族の姿を肯定する段階にとどまっていたのに対して、*Stella*



図 6

Heather Has Two Mommies
Candlewick Press, 2015

Brings the Family は家族の枠をさらに広げる方向に展開している。ふたりの大人と子どもで成り立っている点は同じであっても、周囲の人々が子どもの養育に深く関与していることが示されている点で、それは外に向かって開かれた家族だといえる。主人公とその家族が社会のなかで孤立し、敵対的な視線にさらされているような環境下では、物語が提示する心温まる結論も説得力を持たない。この作品で、規範的ではない家族のなかで育っている少女を取り巻く世界は、愛と優しさに満ちており、タイポグラフィーを含めて曲線を強調した画面構成と、淡い色使いの水彩画にところどころ色鉛筆のタッチを加味したイラストレーションが、そのような世界観を見事に表現している。

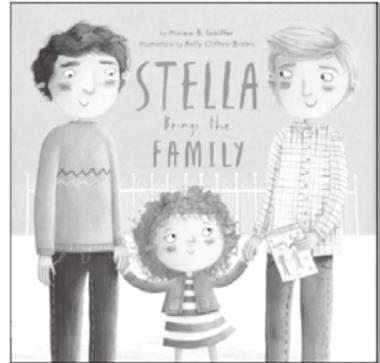


図7

Stella Brings the Family
Chronicle Books, 2015

4. 性的指向の多様性の先にあるもの

ゲイカップル（を思わせるペンギン）の子育てを描いた『タンタンタンゴはパパふたり』や、ゲイカップルの結婚を描いた『王さまと王さま』も、21世紀の作品ならではのユーモアと温かみを有している。これらが日本で教材として用いられるときに期待されているのは、もちろん、性的マイノリティに対する理解の促進である。だが、前節において確認したアメリカのLGBT絵本の例からも明らかなおおり、ここで描かれているような性的指向の多様性は、家族の形の多様性と分かちがたく結びついている。つまり、同性を好きになることを自然なこととして肯定するならば、同性どうしが結婚し、子育てをすることも自然なこととして肯定するのは当然のことだからである。そうであるならば、学校の教室でこれらの絵本を用いて、子どもたちに「同性を好きになってもちっとも不思議じゃない！」と教える時、その後の人生についても異性愛者と同じだけの選択肢を保証しないとしたら、それは子どもたちに対する裏切り行為に他ならないだろう。アメリカにおいて、LGBT児童文学を教育現場で使うことに対して、あるいは子どもに見せること自体についても、一部に強い抵抗があった（そして今もある）のは、あらゆる大人がこの点を自覚しているからでもある⁽¹⁵⁾。

Heather Has Two Mommies と *Stella Brings the Family* との違いにも表れているとおり、アメリカのLGBT絵本で描かれる家族の形には、近年、さらなる変化が起きている。そのことを明確に感じさせてくれる作品が、2018年に日本語でも読めるようになった。パトリシア・ボラッコの『ふたりママの家で』である。レズビアンカップルの養女として育った女性の回想記という

スタイルをとるこの物語が描いているのは、血縁関係こそないものの、親密で情緒的な繋がりので濃い大家族の姿である。ふたりの母親と、異なるエスニック・バックグラウンドを持つ3人の子どもたちが暮らす家には、週末ごとに祖父母をはじめとする親族が集まり、一家は地域社会の重要なメンバーとして、行事でも中心的な役割を担う。そして、祖父母やふたりの母親が亡くなったのちも、子どもたちは家族として、コミュニティとの繋がりを保って生きていく。絵本に教育教材としての役割を期待する立場からこの作品を分析した堀内かおるも、ここで描かれている家族像を、親密な関係性のうえに築かれたカップルと子どもというその本質は伝統的な家族像の範疇を出るものではなく、むしろ伝統的な規範の維持に負担する可能性すらあると批判する一方で、外向きに開かれているその在りように新しさを見出している⁽¹⁶⁾。だが、子どもの本としての基準に照らして作品を評価する立場からは、その批判も称賛も、やや物足りない。

送り手と受け手の権力構造を内面化し、つねに教育指向性を内包する児童文学というジャンルは、いつの時代にあっても、自らを生んだ社会体制から真の意味で逸脱することはない⁽¹⁷⁾。そのような制約を抱える児童文学が目指すのは、社会改良や制度改革それ自体ではなく、「今」「ここ」で生きる子どもたちに「生きのびる力」を与えることである。だからこそ、既存の価値観を揺さぶり、破壊するさいにも、子どもの読者の安心感や充足感を損なわないような表現方法をとる。読者対象として想定する年齢層が低ければ低いほど、そのような傾向は強まるだろう。だがその一方で、表面的には現状肯定にみえたとしても、優れた児童文学作品であれば、やがて読者自身が成長したときに、そのような破壊的側面に気づくような仕掛けを施しているものである。同時に、良心的な児童文学作家であれば、作品がもつ破壊的側面によって傷つく子どもが新たに生まれることのないようにとの配慮も怠らない。

『ふたりママの家で』の関心も、伝統的な家族像を破壊することにはない。外形がどのようなであろうと、子どもが子どもとして生きられる場を称え、そのような場を外部からの圧力（たとえば他者の評価）によって否定する必要はないのだと主張して、子どもの読者を力づけているにすぎない。子どもが生きる「場」を既存の言葉を用いて「家族」と呼びつつも、伝統的でない形を示したうえで、「場」そのものが「家族」から外に開かれた形で拡大していく可能性も提示しているのである。しかし、このような「場」あるいは「家族」を描くことは、児童文学においては決して特異なものでも新奇なものでもない。それどころか、児童文学が長らく追及してきたテー



図8
『ふたりママの家で』サウザン
ブックス社、2018年

マなのである⁽¹⁸⁾。従って、この面でのポラッコの功績は、それを絵本という形式で表現したこと
 に尽きるだろう。そのような児童文学史のなかで結晶化した『ふたりママの家で』が、マイノ
 リティとなりうる子どもの読者の視点に寄り添って、彼らが自己肯定できる物語を提示している
 のはある意味当然のことである。この作品の真価をさらにはっきりと示しているのは、語り手の
 母親たちに敵対的な言葉を投げかける人物を登場させて、そのような悪意にさらされた子どもの
 気持ちを救うだけでなく、その人物の子どもたちをも排除していない点である。ポラッコは、語
 り手一家に対して敵意をもつ親のもとに生まれ育った2人の少年を、語り手一家と笑顔で交流さ
 せ、自らの母親が心無い言葉をぶつける場面では、困惑の表情を浮かべさせている。イラスト
 レーションにテキストを補わせて、子どもの世界に新たなマイノリティを生みだすことを食いと
 めている点には、子ども向けの絵本を数多く出版してきたベテラン作家としてのポラッコの手腕
 が示されている。同時に、祖父母がなぜ一組しか登場しないのか（登場しているのは、母親のひ
 とりミーマーの両親のみ）、生後間もなく養子となった3人の子どもたちの実親との関係はど
 うなっているのか、地域社会を構成するエスニシティの表現は果たして真正なものなのか（真正で
 ある必要があるのか）といった疑問の余地も残している。このような点について、子どもの読者
 は、成長するにつれて気づき、やがて自分の問題として考えていくことになるはずである。

5. 幼い子どものために「多様性」を描く

これまで見てきた日本語で読める3作品は、いずれもそれなりの読書力が必要とされる物語絵
 本であったが、幼い読者を対象とするならば、もっとシンプルな形で家族の多様性を前面に打ち
 出した作品のほうが、受容しやすいはずである。そのような作品もすでに日本で出版されてい
 る。だが、良質なものはまだ少なく、また、必ずしも
 増刷の機会に恵まれているわけでもない。たとえば、
 2005年に翻訳出版されたトッド・パールの『いろ
 りろかぞく』も、すでに古書市場でしか入手できず、し
 かも驚くほどの高価で売買されている。鮮やかな色使
 いを持ち味とするパールが、ポップアート風のイラスト
 レーションで描きだすいろいろな家族には、人間や
 動物ばかりでなく、宇宙人も、そして正体不明の生き
 物まで含まれる。そのような多様性を「いろん
 な かぞくがあるけれど きみのは とくべつ すてきな
 かぞく」(32) という結びの一文でまとめることによ

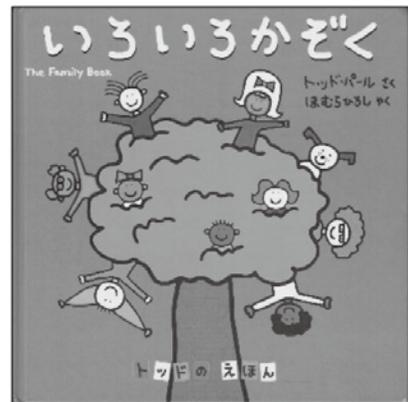


図9

『いろいろうかぞく』フレーベル館, 2005年

て、この作品は「今」「ここで」生きている子どもたちを力づける。「ぎゅっとするのがだいすき！」(8)、「おめでとうをいいあうのがだいすき！」(20)、「いつでもしっかりたすけあってる！」(30-31)といった家族の形容がイメージの固定化に繋がると考える向きもあろうが、大人が小さい子どもとこの作品を分かち合う時、これらの言葉は「子どもが子どもらしく生きられる場」の必要条件となる。そして、同時に、大人に対する厳しい問いかけとなる。この絵本を子どもに読み聞かせながら、そのような場を果たして自分には用意できているのかと、大人たちは自問することになるからである。

ドット・パールが32頁かけて描いた内容を、メアリ・ホフマン(文)とロス・アスキス(絵)は見開き1頁で描き切っている。2018年に日本語版が出版されたイギリス生まれの絵本『いろいろいろんなかぞくのほん』は、「おかあさんがふたりのいえ、おとうさんがふたりのいえ」を「かぞくのかたち」というタイトルのもとに集められた多様な家族像の一例として位置づけ、その後の各見開きにもそれぞれ、「すむところ」「がっこう」「しごと」「やすみのひ」といったタイトルを掲げて、バラエティーに富んだ家族像を提示する。性的指向を特別視せず、多様な在り方を等しく尊重すべしという姿勢を示している点はパールの作品に通じるが、ホフマンとアスキスは、生活、文化、コミュニケーションにまでふみこんで家族のありようを多面的に描きだし、そうすることによって、社会の在りようの多面性にまで光を当てている。最小限のテキストに大量の情報を含むイラストレーションを組み合わせることで、絵図鑑的な性格を持たせたこの作品は、絵を読む喜びをも子どもの読者に提供する。ユーモアあふれるイラストレーションが、型にはまらないのびやかな子どもの姿だけでなく、彼らの自由な発想まで具体化しているうえに、細部にまで小さなお楽しみを隠しているからである。そして、幼い読者がそれらを見逃すことのないよう、作者たちは周到な仕掛けも用意している。ネコのキャラクターを狂言回しに据え、ページターナーの役割をも担わせているのである。扉でそのネコは、すべての頁で自分を探そうように、自分の名前をあてるようにと誘いかける。この挑戦を受けて、幼い読者もネコ探しゲームを楽しみながら頁をめくり、それぞれ独立した情報を、物語のように繋げて読んでいくことになるのである。



図 10

『いろいろいろんなかぞくのほん』
少年写真新聞社、2018年

おわりに

日本における性的マイノリティを描いた絵本の歴史はまだ始まったばかりであり、その内容も限定的である。本稿にてとりあげたのが、性的指向に関連した作品ばかりなのは紙幅の都合であるが、性的指向自体にも多様性があるなかで、ゲイカップル、レズビアンカップルとその家族の在りようを描いた作品ばかりとなったのは偶然ではない。これはそのまま日本におけるこのジャンルの出版状況を反映している。海外では、ポリアモリーやアセクシュアルが主要な役割を演じる児童文学作品も登場しているが、そういった作品が今後積極的に日本に紹介される可能性は低いだろう。また、そもそも絵本という表現形式にそのようなテーマがなじむのか、絵本で表現することに意味があるのかといったことについては別途問われることになる。また、性的指向にかかわるテーマを児童文学が表現するとき、必然的に家族の形の多様性を肯定することになる。教材として利用する場合、利用する側にはその自覚が求められるのはもちろんのこと、作品のもつ力を最大限に発揮させつつ欠点を補うために、まずは作品それ自体を深く理解する姿勢も求められるだろう。とりわけ、自立した絵と文とが絡み合って多面的な物語を紡ぐ絵本については、メディアの特徴をふまえて作品と向き合わなければ、偏った理解しか得られない可能性も高い。想定する読者の年齢層を意識して、表現方法に工夫を凝らした作品がある一方で、ただ単に性的マイノリティを含む家族が描かれているだけの、独創性のないものもある。ストーリーが破綻していたり、イラストレーションがただの挿絵になっていたりするような作品を、わざわざ子どもに手渡さなくて済むよう、大人は、絵本を選ぶ目を養う責任を自覚すべきである。

多様な性的指向を肯定する子ども向けの絵本が、現在、翻訳ものばかりなもの問題だろう。多様性という概念への理解も、対応も、まったく異なる環境で生まれた作品をそのまま紹介するだけでは、日本で生きる子どもたちの抱える悩みに寄り添いきれない場合もあるはずだ。また、背景的知識なしには、作品の真の価値が伝わらないことも往々にしてある⁽¹⁹⁾。そのような形での翻訳出版がその作品にとって、そして、日本の読者にとって本当に幸せなことなのかは問われてしかるべきだろう。結局のところ、日本ならではの性的マイノリティが置かれている環境や、日本の子どもならではのニーズを正しく反映した、真正な声をもつ作品が待たれているのが現状である。なおその際、物語絵本としての体裁をとるならば、少なくとも子どもに手渡すにふさわしい絵本としての質を備えた作品が望まれることは言うまでもない。もちろん、そのような作品は、大人の主張をただぶつけるだけの執筆姿勢からは生まれてこない。子どもの読者に寄り添った、優れた児童文学作品の誕生が期待される場所である⁽²⁰⁾。同時に、日本では、子どもや若者が抱える「性」に関する悩みが、しばしばマンガやライトノベルの主題となってきた伝統があり、

質の高い作品も少なからず出版されているため、児童文学がこのテーマを扱う意義がどこにあるのかという点については、あらためて真剣に考える必要があるだろう。性的指向以上に多様化が進み、子どもや若者の読者からの関心が高い性自認にかかわるテーマとともに、別稿にて詳細に検討したいところである。

本稿は、2018年6月に札幌大谷大学で開催された絵本学会第20回研究大会において、「絵本で考える性の多様性」のタイトルにて口頭発表した内容の一部をふまえつつ、今回新たに書き下ろしたものである。

《注》

- (1) 「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」(平成16年7月施行)
- (2) 「児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について」(平成22年4月23日)
- (3) 「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」(平成27年4月30日、児童生徒課長通知)
- (4) 「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け)」(平成28年4月1日、文部科学省初等中等教育児童生徒課)
- (5) たとえば、性的マイノリティの悩みを主題の一部に組み込んだ、戸森森のこ『ぼくたちのリアル』は、第56回講談社児童文学新人賞、児童文芸新人賞、産経児童出版文化賞フジテレビ賞を受賞し、青少年読書感想文全国コンクール小学校高学年の部の課題図書にも選ばれている。また、トランスジェンダー当事者を主人公にすえたエイミ・ポロンスキー『ぼくがスカートをはく日』(*Gracefully Grayson*, 2014)は、厚生労働省社会保障審議会から「子どもたちに読んでほしい本」として推薦されている。
- (6) 就学前に性同一性障害の診断を受け、身体の性とは異なる性別で小学校入学が認められた児童の事例(神戸新聞, 2006年5月18日)、小学校2年生で診断を受け、年度途中から逆の性での登校が認められた事例(毎日新聞, 2010年2月12日)などは報道されて広く知られている。また、2013年に文部科学省が実施した「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」では、性同一性障害に関して報告のあった606件のうち、26件(4.3%)が小学校低学年の事例であった。
- (7) それ以前にも、性的マイノリティ(あるいは、そのように推定される人物)が登場する作品は、翻訳を中心に散発的に出版されてはいた。だが、当事者の性的アイデンティティを作品の主題と結びつけてまじめに表現した作品となると、90年代以前にその例を見つけることは極めて難しい。メルクマールとなったのは次のような作品である。日本人作家の手になる作品では、1997年に出版された西田俊哉の『両手のなかの海』と、魚住直子の『超・ハーモニー』を挙げることができる。この2作が、主人公にとって厄介な存在(解決すべき問題)として性的マイノリティを描いていたのに対して、1999年に訳出されたフランチェスカ・リア・ブロックの『ウィーツィー・バット』は、主人公とその仲間たちが「性」の多様性をためらいなく肯定する姿を描いていた。
- (8) フェミニズム視点での昔話の書き換え例としてはこれらより先に、ダイアナ・コールスの『アリーテ姫の冒険』が1989年に翻訳されていた。これ自体は挿絵をふんだんに使った童話だったが、その後、訳者グループは独自に布絵本を制作し、その写真を用いた絵本版の『アリーテ姫の冒険』(1993)も出版した。また、この時期には、マイノリティが直面するさまざまな困難を、アルファベットX(多数者)とO(少数者)を登場人物として表現したドラマ仕立ての絵物語R・M・カンターの『Oの物語』(1989)も出版されている。性別のみならずより広範なマイノリティの立場を視覚的に表現した最初期の作品として注目に値する。
- (9) 頁数が付されていない作品については表題紙を1頁として数えた。以下同様。
- (10) ALSCによる定義は以下の通り。“books of especially commendable quality, books that exhibit venturesome creativity, and books of fiction, information, poetry and pictures for all age levels

- (birth through age 14) that reflect and encourage children's interests in exemplary ways." (<http://www.ala.org/alsc/awardsgrants/notalists/ncb> 2019年9月27日閲覧)
- (11) 一例を挙げるならば、宝塚教育委員会が発行している「性の多様性」の指導に関する教職員向け手引き書には、『王さまと王さま』を利用した小学校低学年向けの指導案が掲載されている。同手引き書は、宝塚市のホームページにて公開されている。(<http://www.city.takarazuka.hyogo.jp/kyoiku/iinkai/1002552/1012182/1025339.html> 2019年9月27日閲覧)
- (12) ここでは、性的マイノリティが登場する作品という意味で、この語を用いている。
- (13) 水間, pp.126-27. なお, Lesléa Newman のファーストネームの日本語表記は, 本人の発音に従えば「レズリア」が最もふさわしいと思われる。ここに訂正しておく。
- (14) ここでホモノーマティビティを批判することは的外れである。LGBT 児童文学がそれを前提に成立していることは, 児童文学の本質をふまれば自明である。詳しくは後述する。
- (15) ALA が発表している “Top 100 Banned / Challenged Books: 2000-2009” では, 『タンタンタンゴはパパふたり』が第3位, 『王さまと王さま』が第20位にランキングされている。同リストの1990-1999年版では, *Daddy's Roommate* が第2位, *Heather Has Two Mommies* が第9位であった。
- (16) 堀内, pp. 85-86
- (17) 水間, pp. 129-31
- (18) 『ふたりママの家で』は, ロバータ・シーリンガー・トライツが「フェミニズム児童文学」と呼んだ作品の系譜に位置づけることができる。それは, 人と人のネットワークや相互依存を重視しつつ, 共同体のなかで自己犠牲を払わずに一個人として主体的位置を確保することの大切さを読者に伝える作品である。(141-73)。長女の語りを通じて, 力強い母親たちの生き方を描写したこの作品は, トライツが待望した「母親の声を掘り起こ」(209)す作品といえるだろう。
- (19) たとえば先ごろ訳出された絵本『にじいろのしあわせ〜マーロン・ブンドのあるいちにち〜』は, 擬人化されたウサギを主人公に, 同性愛と同性婚への賛意を幼い子どもでも楽しめる物語に仕立てた絵本である。但し, アメリカの政治状況に対する風刺性の強いパロディ絵本でもあるこの作品が単体で翻訳出版される時, たとえ解説が添えられていても, 日本の読者がこの作品の背景を十分に理解することは困難であり, パロディ作品としてのその価値や, 源泉たる元の作品との間に生じている複雑な力学を読み取ることは全く不可能である。
- (20) 「子どもの視点に寄り添う」ことに注力した作品例としては, これも翻訳であるが, メル・エリオットの『マチルダとふたりのパパ』を挙げておきたい。イギリスの人気絵本シリーズ第3巻にあたるこの作品は, 主人公が, パパがふたりいる友人の家庭も自分の家庭と全く変わらないのだと結論づける過程をユーモアたっぷりに描く。両親を含めて大人はすべて足しか描かれていない独特の画面構成に, 子どもの世界観を大事にする作家の姿勢が顕著に表れている。

引用文献

- 魚住直子, 『超・ハーモニー』, 徳間書店, 1997年
- エリオット, メル, 『マチルダとふたりのパパ』, 三辺律子訳, 岩崎書店, 2019年 (Mel Elliot. *Pearl Power and the Girl with Two Dads*. Egmont, 2016)
- カンター, R・M, 『Oの物語』, 三井マリ子訳, レターボックス社, 1989年 (Rosabeth Moss Kanter, *A Tale of "O"*. Harper Collins, 1980)
- コール, バベット, 『トンデレラ姫物語』, 上野千鶴子訳, 松香堂出版, 1995年 (Babette Cole, *Princess Smartypants*. H. Hamilton, 1986)
- コールス, ダイアナ (作), ロス・アスキス (絵), 『アリーテ姫の冒険』, グループウィメンズプレス 訳, 学陽書房, 1989年 (Diana Coles. *The Clever Princess*. Sheba Feminist Publishers, 1983)
- コールス, ダイアナ (原作), ロス・アスキス (原画), 『アリーテ姫の冒険』, グループウィメンズプレス 訳・布絵本制作, 松本路子・布絵本撮影, 学陽書房, 1993年

- ゼリンスキー, ポール・O (絵), アン・アイザックス (文), 『せかいいち大きな女の子のものがたり』, 落合恵子訳, 富山房, 1996年 (Paul O. Zelinsky and Ann Isaacs. *Swamp Angel*. Dutton Books, 1994)
- 宝塚市教育委員会, 『『ありのままに自分らしく』互いに認め合える学校園所をめざして — 性の多様性について考える』, 2018年2月
- 戸森しるこ (作), 佐藤真紀子 (絵), 『ぼくたちのリアル』, 講談社, 2016年
- トライツ, ロバータ・シーリンガー, 『ねむり姫がめざめるとき — フェミニズム理論で児童文学を読む』, 吉田純子・川端有子 (監訳), 阿咩社, 2002年 (Robert Seelinger Trites. *Waking Sleeping Beauty*. U of Iowa P, 1997)
- 西田俊哉, 『両手のなかの海』, 徳間書店, 1997年
- マンチ, ロバート (文) マイケル・マーチェンコ (絵), 『紙ぶくろの王女さま』, 加島葵訳, 河合楽器製作所・出版事業部, 1999年 (Robert Munsch and Michael Martchenko. *The Paper Bag Princess*. Annick Press, 1980)
- パール, ドット, 『いろいろかぞく』, ほむらひろし訳, フレーベル館, 2005年 (Todd Parr. *The Family Book*. Little Brown, 2003)
- ハーン, リンダ&スターン・ナイランド, 『王さまと王さま』, アンドレア・ゲルマー&眞野豊訳, ポット出版, 2016年 (Linda de Haan & Stern Nijland. *Koning & Koning*. Gottmer, 2000)
- ブロック, フランチェスカ・リア, 『ウィーツイー・バット — ウィーツイー・バットブックス1』, 金原瑞人・小川美紀訳, 東京創元社, 1999年 (Francesca Lia Block. *Weetzie Bat*. HarperCollins, 1989)
- ブンド, マーロンとジル・トゥイス (作), EGケラー (絵), 『にじいろのしあわせ〜マーロン・ブンドのあるいちにち〜』, 服部理佳訳, 岩崎書店, 2018年 (Marlon Bundo with Jill Twiss and EG Keller. *A Day in the Life of Marlon Bundo*. Chronicle Books, 2018)
- ホフマン, メアリ (文), ロス・アスキス (絵), 『いろいろんなかぞくのほん』, 杉本詠美訳, 少年写真新聞社, 2018年 (Mary Hoffman and Ros Asquith. *The Great Big Book of Families*. Dial Books, 2011)
- 堀内かおる, 「絵本に描かれた同性カップルと子どもたちにもみる『家族』像 — Patricia Polacco 作品 *In Our Mothers' House* を例に」『ジェンダー&セクシュアリティ — 国際基督教大学ジェンダー研究センタージャーナル』第6巻 (国際基督教大学ジェンダー研究センター), 2011年, pp.79-91.
- ポラッコ, パトリシア, 『ふたりママの家で』, 中川亜紀子訳, サウザンブックス社, 2018年 (Patricia Polacco. *In Our Mothers' House*. Philomel Books, 2009)
- ポロンスキー, エイミ, 『ぼくがスカートをはく日』西田佳子, 学研プラス, 2018年 (Ami Polonsky. *Gracefully Grayson*. Disney-Hyperion, 2014)
- 水間千恵, 「アメリカのLGBT作品における家族像の意味 — ノーマ・クラインとレスリー・ニューマンを例に」, 白百合女子大学児童文化研究センター児童文学に見る家族の国際比較プロジェクト編『子どもの本と家族』, 白百合女子大学児童文化研究センター, 2010年, pp.120-33.
- リチャードソン, ジャスティン&ピーター・パーネル (文), ヘンリー・コール (絵), 『タンタンタンゴはパパふたり』, 尾辻かな子・前田和男訳, ポット出版, 2005年 (Peter Parnell, Justin Richardson and Henry Cole. *And Tango Makes Three*. Simon & Schuster Children's Publishing, 2005)
- Haan, Linda de and Stern Nijland. *King & King & Family*. Tricycle Press, 2004
- Newman, Lesléa and Diana Souza. *Heather Has Two Mommies*. Alyson, 1990.
- Newman, Lesléa and Diana Souza. *Heather Has Two Mommies*. 10th anniversary ed. Alyson, 2000.
- Newman, Lesléa and Laura Cornell. *Heather Has Two Mommies*. Candlewick Press, 2015.
- Schiffer, Miriam B. and Holly Clifton-Brown. *Stella Brings the Family*. Chronicle Books, 2015.
- Willhoite, Michael. *Daddy's Roommate*. Alyson, 1990.